

近代アメリカでの日本建築ならびにその従事者への認識の変遷と構造

—建築における異文化交流の事例として—

主査 中谷 礼仁*¹

委員 グレゴリー・克蘭シー*², 内田 青蔵*³, 田中 厚子*⁴, 松浦 剛*⁵

近代アメリカにおける日本建築およびその従事者についての認識の変遷を構造的に把握することを目的に、1870年代から第二次世界大戦までのアメリカの建築関連雑誌（購読層の異なる5誌を選定）に掲載された日本関連の記事を抜粋し、収集分析を試みた。結果として全データ275件から、各雑誌の興味の対象や日本に対するイメージの違い、また、年代による記事量や内容の変化などの構造が明らかになった。日本が「芸術の国」と賞賛された19世紀末から、日本の近代化によりそのイメージが壊れ記事数が激減する20世紀初頭への過程、さらに日本建築が咀嚼され米国内に内向化する過程を検証した。

キーワード：1)異文化交流、2)近代建築、3)国家間、4)大工職人、5)ジャポニズム、
6)アメリカ、7)アメリカ建築界、8)鏡

HOW JAPANESE ARCHITECTURE AND CARPENTERS WERE PERCEIVED IN MODERN AMERICA

—A Study of American Architectural Journals of the Nineteenth and Twentieth Centuries—

Ch. Norihito Nakatani

Mem. Gregory Clancey, Seizo Uchida, Atsuko Tanaka and Tsuyoshi Matsumura.

This research project traces interests in Japan by the American architectural world from the 1870's through the mid-twentieth century by examining articles in a selection of the major American architecture-related journals. We chose five major American journals representing a range of architecture-related readerships. Analyzing a total of 275 articles, the structural transition of their numbers and contents as well as their changing image of Japan was clarified. We have traced a number of important trends, such as the transition from an admiration of Japan as an 'Artistic Country' in the late nineteenth century to a decrease in Japan-related articles in the early twentieth century because of Japanese modernization.

1. はじめに

1.1 研究の目的と背景

本研究は、近代建築における異文化交流のあり方の一端として、近代アメリカにおける日本建築ならびにその従事者についての認識の変遷を、構造的に理解することを目的としている。これまでの日本近代建築史研究では、国内の現象を解明することに重点が置かれてきたが、近代建築は異文化との接触交流を前提とした「自国的文化」の発露でもある。複数の地域、国家にまたがる近代建築の関係像を再構築することが必要であろう。日本においては、近代化への体制がほぼ固まった19世紀後半から、アメリカにおいては南北戦争以降から20世紀前半を中心として、アメリカにおける日本の建築ならびにその従事者に対する複数の建築雑誌を対象とした、悉皆的な収集分析を試みた。

アメリカは、特に住宅分野において、日本との相互的な影響が常々指摘されてきた¹⁾。また同国での各種ジャーナリズムにおける日本建築ならびにその従事者を扱った記事も、たびたび紹介されてきた。しかしながら、アメリカ人による日本の建築文化に対する認識とその展開過程については、著名な建築家あるいは20世紀前半の同国の万国博覧会周辺に限られ、アメリカ建築界全般におけるその構造は明らかになっていなかった²⁾。またその際に重要なのは、彼らの日本理解に対する「正確さ」を評価の指標に置くのではない。いわば日本建築は彼らの近代化にとっての「鏡」として機能しているはずである。日本建築とその従事者たちに、各階層のアメリカ人たちが、何を求め、何を獲得していったのか。それをとらえることも、中心的なテーマの一つである。

*¹ 大阪市立大学 講師
*³ 文化女子大学 教授

*² Assistant Professor, Dept. of History, Faculty of Arts and Social Sciences, National University of Singapore

*⁴ アクセス住環境研究所

*⁵ 株式会社フジタ大阪支店計画設計部

1.2 研究の方法

1.2.1 近代アメリカの建築関連雑誌における関係記事の悉皆調査

調査を行うにあたり、対象雑誌を次の条件によって選定した。

- (1) なるべく継続して発行されているもの
- (2) 構造的把握のための、建築関連雑誌の分類化

建築は多様なジャンル、階層を包括するものであるから、それらの特質ならびに諸関連を把握するためには、上記(2)のような分類化とその条件に最も見合った雑誌の選定が必要である。今回は購読層を、研究者、建築家、施工業者とするもののほかに、一般美術、家庭雑誌の5つに分類し、選定を行った。

また、アメリカには近代以降の建築関係の記事を網羅した著名なThe Avery Index to Architectural Periodicals, Burnham Indexが存在するが、今回の探索の限りでは、ほぼ研究的、建築家的な興味に従って抽出されていた。多種の関連雑誌が反映されているものの^{注3)}、本研究の目的に沿った編年的な動向をみるにはその選定基準がいまいであった。この2つのリストの内容を検討した上で、ページごとの調査を行った5雑誌を決定した。

また、各雑誌における記事の抽出方法は以下によって行った。

- (3) 合本に収録された各雑誌の年ごとのインデックス(件名分類含む)あるいは巻ごとの目次、いずれもない場合は、直接記事タイトルをあたった。
- (4) 検索基準として、"Japan", "Japanese", 日本に関する固有名詞、それらのいずれかの単語が(3)に記載されているもののみを取り扱った。

1.2.2 対象雑誌群のカテゴリー分析

各雑誌ごとの対象記事を表2-1にして掲載した。また便宜的なものであるが、その概要把握のために、内容をカテゴリー別に分類した(重複含む)。A: Japanese Life (日本の生活全般-ニュース含む)、B: Japanese Art (日本美術)、C: Japanese Gardens (日本庭園)、D: Interiors (インテリア)、E: Japanese Craftsmen/Daiku (日本人職人、大工)、F: Japanese Traditional Architecture/Housing (日本の伝統建築、住居)、G: Japanese Modern Architecture/Housing (日本の近代建築、住居)、H: Japanese Influence in America (アメリカにおける日本建築文化の影響による諸活動)、以上8のカテゴリーである。

1.2.3 各雑誌の個別分析

以上のカテゴリー分析を前提としつつ、各雑誌の性格を抽出した。さらに注目される記事内容について、紹介した。

1.2.4 対象雑誌群での構造分析

対象雑誌群の記事の動向を比較し、その全体的な推移、相互の影響関係等を分析した。

2. 書誌

今回の分析対象は、以下の5誌である。

- (1) The American Architect and Building News, weekly, James R. Osgood & Co. Publishers, Winthrop Sq. Boston. (創刊当初以下同様)、1876-1938 (以下AABNとする)
- (2) The Architectural Record, monthly, The Architectural Record Co. 14 & 16 Vesey St. NY, 1891- (AR)
- (3) Carpentry and Building, monthly, New York, David Williams, 83 Reade Street, 1879-1930 (CB)
- (4) The Craftsman, monthly, The United Crafts, Eastwood, NY, 1901-1916 (CR)
- (5) House and Garden, monthly, John C. Winston Co. 919 Walnut Street, Philadelphia, 1901- (HG)

一般に、対象時期における同国内の建築雑誌に安定したものは少なく、地方、国家両レベルで組織だった運営がなされていたとは言えない。その中でこれら5誌は、比較的部数の多い全国的な雑誌であった。それぞれが異なる読者層を対象にしており、AABNとARは主に建築家の雑誌であるがAABNは建設業者にも購読された。CBはアメリカの大工(Carpenter)の雑誌である。アメリカにおける大工は建築家(Architect)とは異なるクラスに属しており、両者は互いの雑誌を併読する傾向は少なかった。CRはアーツ・アンド・クラフツ運動を愛好した上流あるいは中流の上といった階層の雑誌であり、読者には女性が多く含まれていた。HGは主として女性の雑誌でCRよりも広範囲の読者層を持っており、建築同様、造園やガーデニングにも興味を持っていた。

AABNは特に長期間発刊され、アメリカ建築の「記録雑誌」とみなされてきた。CBも同様に長期にわたり、大工・建設業者の間では突出した部数を誇る雑誌だったが、ARはやがてAABNを吸収し、20世紀前半におけるアメリカ建築界第一の雑誌となった。CRは1916年に廃刊となったが、HGはアメリカの主要な雑誌となり現在に至っている。以下にそれら5誌についての紹介ならびに個別の分析を行う。なお文中にくくりにでくられたのは文献ナンバーであり、表2-1における各記事の通し番号に対応する。

3. AABNについて

AABNは総計152巻出版された。1908年に名称がAmerican Architectに短縮され、さらに1936年から38年まではAmerican Architect and Architectureと称し、以降ARに吸収された。比較的ジャーナリスティックであるが、建築家や批評家による2~4ページの長い記事も掲載されている。同誌は、アメリカの日本への興味が最も高い時期に創刊された。周知のごとく、ペリーが19世紀中葉に日本を開国させたと同時に、日本への一般的な興味の第一波を引き起こした。1860~65年の南北戦争と南部再建がアメリカの関心を国内に引き戻したものの、アメリカ

カ最初の万国博覧会である1876年のフィラデルフィア博覧会が、再び日本への興味をかき立てた。日本の展示は、日本の大工が珍しい道具や技術をもって建物を建てた壮挙もあって、最も人気があった。

3.1 全体カテゴリーによる今回対象記事の性格

今回の選択基準によるAABNの対象記事は全135件となった。抜きん出て数が多いのは週刊によるものと考えられる。AABNはフィラデルフィア博と同年に創刊され、続く4年間に19件の日本に関する記事を掲載した。編集者の日本への関心は続き、1880年代には45件、1890年代に40件の記事があるが、後者は1893年のシカゴ博に関するものが多い。1900年代は日本関連の記事は16件に減少、次の1910年代には6件になる。さらに1920年代には6件、雑誌が廃刊となる1938年までの1930年代はたった1件である。故に1870年代から1880年代にかけてが最も日本への関心が高かったと言える。これらのカテゴリー別件数を、表3-1に挙げる（重複を含む）。

表3-1 AABNにおけるカテゴリーによる記事件数

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H
件数	53	51	8	3	23	43	22	7

庭園、インテリアに関する記事は少ないが、生活全般（含ニュース）、日本の美術、大工職人、伝統建築、近代建築の動向をいずれも広く扱っている。これは同誌がアメリカの建築界における広範な読者層を対象としていたことによろう。速報性は5誌の中では最も早く、日本でのイタリアからの美術教授の招聘〈5〉、前年の東京での大火を3か月後に紹介している〈7〉。また日本における近代建築の展開の動向についても比較的初期より紹介している〈9、20など〉。E. S. Morseの著作「Japanese House and Their Surroundings」(1886)が刊行される以前をもってAABNの初期とすると、当時における日本の建築についての認識は、大仏の寸法〈14〉、和紙の性質〈12、19〉、大工職人の優秀性〈2、18、23〉、東洋における日本美術の位置づけ〈15〉、五重塔の心柱についての驚異と懐疑〈48〉、火事と地震国としての理解〈13〉などがトピックとして報告されている。

3.2 執筆者について

署名記事は少なく、計135件中、7件である。いずれの執筆者についても詳細は不明である。1896年に徳川期の寺院について寄稿したC. T. Matthews〈93〉は、同時期にARにも記事を発表している。

3.3 引用された記事について（他紙との関係）

国内外のほかの出版物からのニュースのコピーが多く掲載されている。英語圏の新聞（New York Times, London

Times）、技術専門誌（The Builder Engineering, Invention）、ガイドブックなどで41件に上る。

3.4 各記事の紹介

1870～80年代の記事では、日本が西欧が失った美的感覚を備えた「芸術の国」として表現されている。その時期のすべての記事が日本を賞賛し、西欧との比較において好意的である。特に日本の大工職人は、編集者に退廃的とみなされた西欧の職人と比較されている〈23〉。これらの日本への誇大な賞賛が、アメリカと英国の組合組織の拡大に対立する編集方針が影響していると考えられる。AABNは繰り返し日本とアメリカの職人を比較し、日本人がその仕事だけに集中し、賃金増や労働時間の短縮などの政治的活動にかかわらないことを強調する。同国の組合活動は南北戦争後に急成長しており、AABNは組合の目的に同調しない建築エリートたちのマウスピースでもあった。日本は中世ヨーロッパのように、政治階層を超えて、すべての階層が美のための美を追求する「美的」な世界のモデルであるとされた。

1890年までに、このような芸術の政治的論議の中での「芸術の国」としての日本の機能は、弱まったと考えられる。日本の西欧化を語る記事が、日本を賞賛する記事よりも多くなった。AABNはシカゴ博の日本建築を高く評価したが、ある記者は、賞賛すべき作品をこれまでのように日本の職人総体を主語とせず、個々の芸術家の仕事として解釈した〈82〉。片山東熊の赤坂離宮計画を知らせる1899年の記事には「竹と畳の家が過去のものとなった時、何が日本へと私たちを向かわせるだろう」と書かれている〈104〉。

1900年代の日露戦争での日本の勝利が、日本が西欧勢力に参入したとみる視点と同様に、AABNでは芸術分野での「日本」の排除の発端となった。1905年に編集者は「芸術人」としての日本人への戦争の影響を憂慮し、「長い自国の芸術史の終焉と、えせ芸術運動の始まり」を嘆く。1907年の記事では日本がソウルのパンダック塔を撤去した行為を「レイプ」と称した〈118〉。1919年までに日本関連の記事は極端に減少し、ある書き手は、東京が「世界の建築が混在する最も汚い都市になるだろう」と述べている〈123〉。このような近代性の拡大は、なぜ日本関連の記事が関東大震災以降、同誌において途絶えたかを説明していよう。

4. ARについて

AR誌は5誌の中でも最も息の長い雑誌である。また、1938年には先のAABNを吸収して、20世紀前半においてはアメリカ建築家界の主流の月間雑誌であった。1925年頃には社名をF. W. Dodge Corporationに変更している。今回対象とした創刊時から1945年までの期間をみると、

各号は小論文程度の長い記事が10件程度、それにニュースや編集後記が毎号加わるという構成になっている。日本建築に関する記事についても、比較的記事数の多かった1900年前後を中心に、ある程度まとまった量を持つ記事が掲載されている。

4.1 全体カテゴリによる今回対象記事の性格

今回対象記事は全20件であり、その内訳は以下のようになった。これらのカテゴリ別件数を、表4-1に挙げる(重複を含む)。

表4-1 ARにおけるカテゴリによる記事件数

カテゴリ	A	B	C	D	E	F	G	H
件数	1	4	0	2	0	7	9	2

AR誌における最初の日本関連記事は、C. T. Matthewsによる一連の記事である(136, 137, 138)。日本の伝統建築を扱ったもので、同誌においては初期を中心に最も扱われることの多かったテーマである。1905, 6年頃には日本関連記事のピークの一つがある。伝統建築のほか美術、生活についてが多くなり、消えゆく文化として日本の伝統芸術を憂えている。しかしこれ以降になると、初期のような長い記事として日本建築を扱うことがなくなる。後期において散見されるのは、日本居室を持つ住宅の写真など(写真4-1, 写真4-2)でよりインテリア的なものである。またF. L. WrightやAntonin Raymondによる日本での建築作品を紹介が開始される。

4.2 執筆者について

Zaida Ben-Yusufによる日本滞在時の体験記が文献<141>であり、その夫人も文献<140>における撮影者として登場している。また前述のC. T. Matthewsについても、分析や描写の精度から判断すれば日本に滞在の経験があると予想される。この他、同誌において日本建築研究の権威とされたR. A. Cramも来日の経験がある。来日については、日本の建築雑誌でも何回か報道された。このようにAR誌における日本関連記事は、実際日本に滞在した者、あるいはアメリカに出現した日本建築を直接見た者によって書かれていることが多い。しかしピーク時以降については、日本関連記事の減少とともに、彼

らの名前が再び見られることはない。

4.3 引用された記事について(他紙との関係)

AR誌の日本関連記事には書き下ろしのものが多く、他誌から引用が判明する記載は見当たらない。

4.4 各記事の紹介

(1) 日本の伝統建築に関する認識例

日本関連記事の掲載がピークであり、実質上の最後となった1905, 6年までを分析すると、日本の伝統芸術をその精神性から保存させていきたいとする意識が、ほとんどの記事からうかがえる。例えば1906年の前出<141>では、日本で使用した火鉢(写真4-3)に対して、その審美性のみならず礼法の面からも陶醉しており、石油ストーブに取って代われようとする実状を憂いている。また編集部がR. A. Cramの日本建築研究と併せて論じている1906年の2つの記事<142, 143>においては、世界主義が進展する中、伝統芸術を残している稀有な国として日本を認識している。そして彼ら編集部の仕事として、「伝統的感覚と、芸術や詩など伝統的表現を保持しているすばらしい人々への同情の感覚を、精一杯啓発すること」が述べられている。

(2) 日本建築の発展過程についての認識例

日本建築がその発展の歴史において、大陸からの外来文化の影響を受けたことは言うまでもない。ただ、その受容のされ方に関して模倣や折衷などさまざまな論議がなされるわけであり、C. T. Matthewsによる前出の記事の中でもこれに関して共通した見解が示されている。そのうちの1896年の<137>は、東アジアの建築として主に中国と朝鮮、それに日本の建築を少し説明してそれぞれの比較を行ったものであるが、その中で朝鮮や日本の建築を中国建築の影響下にあるものと指摘した上で、さらに「東への移行の中で最も洗練され理想化された」と日本建築を特別視する。この日本建築の発展説は、同時期の<136>や<138>でも同様に繰り返され、その絶頂が、芝の寺や日光の徳川寺だと説明される。日本建築の特徴を近隣諸国のそれと比較する視点は、前出のE. S. Morseの著作でもみられるが、それらの関係性から発展過程を明確に主張した外国人による貴重な例であり、その出自

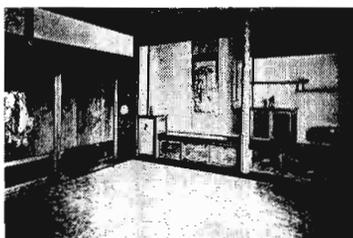


写真4-1 JAPANESE INTERIOR
AR<144> 1914年より



写真4-2 TEA HOUSE
AR<145> 1918年より



写真4-3 THE HIBACHE OF
EARTHENWARE AR<141>1906年より

についての検討が待たれよう。

5. CBについて

書誌において述べたように、本書は米国における建築施工者を対象にした月刊雑誌である。1910年よりBuilding Ageと改名した。それ以降は誌名が示すごとく、鉄筋コンクリートや鉄骨などの近代的生産の関連が主要対象になる。今回の調査では、日本の記事が散見される改名以前の時期に絞り、その内容を調査、分析した。

5.1 全体カテゴリーによる今回対象記事の性格

今回の選択基準による対象記事は全27件となった。これらのカテゴリー別件数、表5-1を挙げる（重複を含む）。

雑誌の性格によるものか、実際の施工方法への言及〈157, 163〉、技術者的な視点からみたコメント〈161な

表5-1 CBにおけるカテゴリーによる記事件数

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H
件数	6	5	0	4	12	8	7	0

ど〉が多い。とりわけ日本の伝統建築ならびに大工に関する記述は割合的にも多く、その技術的分析に及ぶものもある〈163, 167〉。その執筆主体の多くが日本滞在を体験したことのある技術者層と考えられる点〈174など〉が、特に注目される。

それに比較して、一般的な日本美術に関連する紹介は、初期以外はほとんど見られず〈160〉、また他雑誌ではしばしば取り上げられる日本庭園に関する記事が皆無であることも大きな特徴である。

日本建築についての紹介は、日本の建築専従者に関する記事とともに多い。大きくは19世紀がほとんど伝統建築についてであるのに対し、20世紀以降は、赤坂離宮の建設を中心とした近代以降の建築についての紹介がその主要をなしている〈179など〉ほか、アメリカから日本への建設輸出についてのレポートも見られるようになる〈175〉。19世紀の方が総じて日本建築に対するより深い「理解」が試みられているのに対し〈164, 165, 172〉、20世紀以降は同じ題材を扱いながら、その知識がむしろ後退している例も見受けられる〈177, 182〉。また、日本の状況を参照しつつ、アメリカの現状についての批判的見解、展望を述べる比較論も多い。

5.2 執筆者について

署名を持つ執筆はなく、著名な人物によるものは他雑誌からの引用記事のみである。逆にペンネーム、読者からの投稿が散見され、日本での就業経験、滞在経験を持つ人物による手記が多い。この点は貴重である。

5.3 引用された記事について（他紙との関係）

The Builder, The Popular Science Monthlyなど、具体的に記されているのは5件のみである。

5.4 各記事の紹介

ここでは19世紀における日本伝統建築、ならびにその専従者についての認識を、端的に示す記事を紹介する。

(1) 日本の伝統建築についての認識例

1883年の文献〈164〉は、日本の五重塔についてのC. DressereとJ. Conderの著名な論争を引用した記事である。同記事では日本の五重塔の構造が、世界の中でも独特なものであるとし、両者の意見を抄録した上で、心柱が当初より浮いていて耐震的な振り子構造であったとするC. Dressereの説よりも、後の収縮によるとしたJ. Conderの説に重きを置いている。現地日本での建築家や古老の大工などにも確認したとしている。

また日本の住居についての紹介も多々見受けられる。特に初期における論調が、日本の伝統住居を合理的でシステムティックなものとして肯定的に受け止めている。1880年の〈159〉は日本の大工による和風住宅の建て方を基礎から順次に紹介した本格的なものであり、その詳細さからして技術者の実見によるものと思われる。また、1884年の〈165〉はThe Builderからの引用記事であるが、畳が普遍的に取り換え可能であること、その面積単位が住居全体の規模を決定するモジュールになっている点等について、高い評価がなされている。

(2) 日本の大工、技術者についての認識例

1880年の前出〈159〉においては、日本における大工(Daiku)の地位の高さを報告している。また1886年の〈167〉では、Minesの学校において4年間席を並べた日本人技術者たちのことを批評した投稿であり、彼らの高い記憶力と品性を述べ、同時にオリジナルなリサーチに対する能力の欠如が指摘されている。いわば現在の日本人論と同様の視点が存在することが知られる。

(3) 日本の伝統建築技術に対する認識例

1882年の前出〈163〉も読者（フィラデルフィアのX. Y. Z氏）からの投稿であるが、Centinel Exhibitionでの日本人工が用いたカンナに対する手つきの素早さの理由を分析している（図5-1）。砥石の種類、たがねの形状を評価するもので、技術者ならではの視点がうかがえる。

(4) 日本の近代化についての認識例

1882年の〈161〉は、実際に日本で技術者として就業した人物によるものである。レンガのぜい弱性、下水の不完備などの、日本の急速な西洋技術の摂取と現実との矛盾が指摘され、日本の官僚制が発展の足かせになっていることを批判している。また1894年の〈171〉では、横浜に竣工した、陸屋根、鋳鉄製ですべての壁を中空のガラスブロックで満たしたDr. W. Vander Haydenの住宅

を紹介している。その真偽は確認できないが、新出の史的事例と考えられる^{注4)}。

5.5 "Japan"あるいは"Japanese"の消失について

CBにおいても1900年以降に"Japan"あるいは"Japanese"を冠した記事が激減する。これは19世紀後半より継続して日本建築関連の記事を扱ってきた、今回対象となった建築雑誌全般に共通する性格である。しかしながら同時に、上記の単語を冠さず、かつ日本建築からの影響を類推できるような記事が、1900年代の後半から散見される。例えばCoolidge & Carlson, Architect設計による1907年1月号におけるアムステルダム派をほうふつとさせるバンガロー^{注5)}に付属した門は、檜皮葺の唐破風の門を思わせる(写真5-1)。あるいはMatt Rileyの設計施工によるウィスコンシン州のFish Creekに竣工した別荘を紹介した1911年4月号の記事^{注6)}においては、Clay Lancasterであれば当然日本からの影響と断じるに値する、金閣寺をイメージしたかのような竣工写真ならびに図面が掲載されている(写真5-2)。1900年後半、同誌においては盛んに近代的なバンガロー(Modern Bungalow)が取り上げられるようになり、1909年には懸賞競技の結果が3ヶ月にわたって掲載されている^{注7)}。このような流れの中で、日本的モチーフは近代的バンガローの一要素として回収されるに至ったかのようなのである。

6. CRについて

CRは1901年から1916年まで、ニューヨーク州において芸術運動家G. Sticklyを編集長として刊行された。1, 2号でモリスとラスキンを特集しているように、アメリカでの「アーツ・アンド・クラフツ運動」の先導的役割を担うべく創刊されたが、次第にその内容は実務的になり、1904年からはクラフツマン・ハウスという木造住宅を販売する媒体にもなった。内容としては、手工芸、家具、建築、保存改築、庭園、人物、教育、演劇、詩、短編小説、旅行、歴史など教養のある家庭婦人を対象にしたものが多い。出版部数は最大22,500部(1910年)であった。

6.1 全体カテゴリによる対象記事の性格

今回対象記事は全62件であり、これらのカテゴリ別

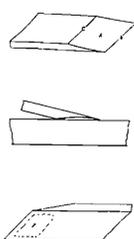


図5-1 日本のカナナの観察図
CB <163> 1882年より

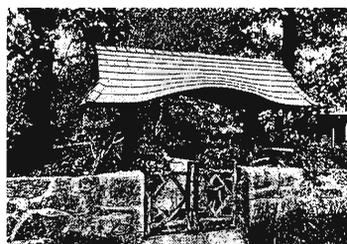


写真5-1 檜皮葺の唐破風を思わせる門
CB <12> 1907年より



写真5-2 金閣寺をほうふつとさせる別荘例
CB, 1911年4月号より

件数、表6-1を挙げる(重複を含む)。

表6-1 CRにおけるカテゴリによる記事件数

カテゴリ	A	B	C	D	E	F	G	H
件数	13	27	13	8	5	9	0	12

初期(1901~1905年)は、純粋芸術としての日本美術に関心が高く、日本画・木版画の自然観や特殊性を賞賛する記事が多く見られる。また、封建性から近代化を目指す日本の歴史的特異性を強調する記事や、生活用品に芸術性を見出した記事が多い。記事は論文調で、20ページに及ぶものがある。中期(1906~1910年)になると、日露戦争後の日本を戦勝国すなわち近代国家として認識するとともに、伝統的な職人技術に支えられた、質素で自然な日本の住宅や庭園から学ぼうとする姿勢がうかがえる。バンガロー住宅への日本の影響に関する記事も見られる。後期(1911~1916年)は、本雑誌がより実務的になる傾向に伴って、インテリアのエレメントとして日本建築や美術をどのように利用できるかという視点からの記事や、書評・広告が増加した。ただし建築技術や資源に関する記事は見られない。

6.2 執筆者について

初期は特に記名論文が多いので、執筆者は多岐にわたる。福井藩理化学教師として滞日した『皇国』の著者であるElliot Griffis, E. Fenollosa夫人のMary Fenollosa, ロンドンのJapan Society会員のO. Perciva, E. S. Morseの助手をし、日本美術商としてアメリカで活躍した松木文恭、ワシントンの国立美術館のR. I. Geare, など総勢20名を超え、その多くが来日経験者と思われる。

6.3 引用された記事について(他紙との関係)

筆者書き下ろしの記事が多いため、直接的な引用はニュース欄にしか見られず、Japan Society Bulletinから引用した<234>と<235>の2件があるのみである。

6.4 各記事の紹介

(1) 日本美術について

1903~1905年の記事では「西欧の影響下でも日本美術は雑種になることはない」<184>、「日本が最盛期のギリ

シャ以上に美と用を日常生活で統合した」〈186〉など、日本の美術の普遍性を挙げ、「芸術の国」として比類なき価値を見出すとともに、生活の中の芸術として、酒器〈191〉、箱〈192〉、花瓶〈196〉、手ぬぐい〈197〉等の日用品の芸術性を論じている点が注目される。さらに、日常生活に根ざした美術という観点から、正月と梅〈207〉や、生け花〈229〉、門松〈242〉についての記事がある。

(2) 日本庭園について

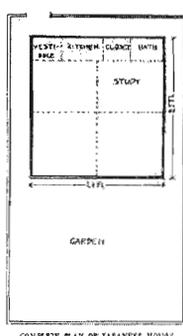
1904年の「日本ではすべてが完全に造形され配置されており、日本人にとって自然とは繊細な楽器のようなもの」〈190〉という芸術性を重んじた立場から、後半はより実践的になり、日本の小庭園を評価し、そこからアイデアを得ようとする傾向が見られる。自宅に池のある日本庭園を造った例〈213〉、太鼓橋、飛び石、ランタンなどを紹介した例〈221〉、さらに具体的に「日本人だったら小さな庭をどうするか」〈230〉や、日本の着想からの裏庭の見直し〈231〉、東屋〈236〉など、「暮らしの中に日本庭園の良さを採り入れよう」と啓発する。

(3) 日本の生活について

河川での船上生活を「質素で芸術的」と紹介する1906年の記事〈205〉、京都の一教授宅を例に、家計簿や住宅プランを挙げて説明した記事〈206〉(図6-1)、日常の喜びに結びついている日本の労働と生活は、「それ自体が美的」とする記事〈217〉など、アメリカと異なる質実な生活を賞賛する。また、女性教育を取り上げたものとして、京都同志社の女学校を取材した1914年の記事〈238〉がある。

(4) 日本の建築・住宅について

1906年の「アメリカを含め西欧のこれからの建築が装飾のない正直(honesty)でシンプルな構法に回帰するにあたって、木造建築として完璧である日本建築の原則に学ぶべきものが多い」〈204〉や、日本が中国の影響から独自に日本建築をつくり上げたことを引用し、アメリカ国家の表現としての建築を論じた1909年の〈212〉には日本の伝統建築への同調が表れている。また、カリフォルニアのバンガロー住宅への日本の影響を述べた〈210, 214, 222〉(写真6-1)、西欧人が日本に住む場合の住まい方について、アメリカ人版画家の住宅を例にとって記述した〈211〉は、異文化間の住宅例として興味深い。



Taking a note-book from his pocket he jotted down these items:

Rent	240 yen
House tax	10 "
Wages	80 "
Fuel	25 "
Light	10 "
Clothes	30 "
Food	109 "
	465 yen

図6-1 京都の住宅平面図と家計

CR 〈206〉 1906年より



写真6-1 日本の影響のあるバンガロー住宅

CR 〈210〉 1907年より

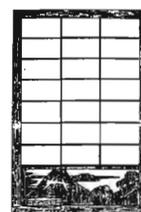


図6-2 日本風の窓として紹介された例

CR 〈224〉 1912年より

(5) 日本の職人・大工について

「大工が座って仕事をするのはすべての職業で座位の習慣があるからで、鋸やカンナを西欧と反対に使うのも姿勢からきている」〈195〉、「日本では職人は芸術家である」〈すべての階層が芸術に対して愛情を持っている〉〈217〉など、アメリカの職人との比較において、近代化以前の職人社会を理想化している。

(6) インテリアについて

1911年以降、日本風のインテリアにすぐ応用できる小物や部材を紹介する記事として、窓〈224〉(写真6-2)、欄間〈225〉、照明〈226〉、杉仕上げ〈228〉、ろうそく立て〈244〉がある。また日本風インテリアの例としてイタリアのデコレーターが造ったアメリカのアパート〈241〉がある。

6.5 小結

「シンプルで自然な生活」を提唱する本誌にとって、日本建築・庭園の簡素な美から学ぶべきものは多かった。さらに、生活と工芸・芸術の一致を目指す「アーツ・アンド・クラフツ」の流れにおいて、日常に芸術が織り込まれた日本の生活は、一つの理想であったと思われる。感嘆と賞賛に満ちた初期の記事から、日本の要素をアメリカのインテリアに採り込もうとする後期の実践的記事への変化は、日本建築・美術がアメリカに消化され、そこに適応していくプロセスを示すととらえられる。

7. HGについて

同誌は月刊誌として、1901年にフィラデルフィアで創刊された。1906年から出版社名はJohn C. Winston Co., となり、1909年から出版社名もMeBride,Winston & Co., 住所もニューヨークに移っている。その後、出版社の拠点は変わらないものの出版社名は1911年にはMe Bride, Nast & Co., 1915年にはConde Nast & Co., と変更されている。読者は主婦を中心とする一般人で、その内容は1908年の記述によれば「An Illustrated Monthly Devoted to Practical Suggestions on Architecture, Garden Designing and Planting, Decoration, House Furnishing and Kindred Subjects」とあり、まさに住宅・庭園・家具を中心とした家庭生活に対する現実的な提案を行うことを目的とし

ていた。今回の調査では、調査先の所蔵状況から1922年までしか資料収集ができなかったため、今回は1902年から1922年の20年間を分析している。

7.1 全体カテゴリーによる今回対象記事の性格

今回対象記事は全30件であり、これらのカテゴリー別件数、表7-1を挙げる（重複を含む）。

表7-1 HGにおけるカテゴリーによる記事件数

カテゴリ	A	B	C	D	E	F	G	H
件数	5	8	14	5	5	4	1	13

日本美術および庭園に関する記事が圧倒的に多い。通時的に見れば、1909年までは庭園関係の記事が多く、かつ、日本庭園に深い精神性を見出し、それを高く評価しようとする意図がうかがえる。それに対し、1910年以降では美術品全般の紹介が多く、精神性よりも日本美術の優れた技術的な側面に注目しているように思える。また住宅関連記事は少ないものの、1909年以降に集中してみられる。住宅関連記事が少ない理由として〈271〉にみるように伝統的住宅の特徴として真壁造で部材が意匠材を兼ねていること、間仕切が可動であること、自然の材料を使いこなしていることを述べていることから明らかのように、同誌の発行以前に既にわが国の伝統的住宅の情報が、同国で行き渡っていたためと推察される。また、1909年以降に住宅関連記事がみられるのは、〈270〉のサブタイトル「Interiors Decorated and Furnished in the European Manner in Houses of Traditional Japanese Architecture」からうかがえるように、単なる伝統的な住宅の紹介ではなく、西洋文化の流入後の日本住宅の様子を述べるためであったと推察できる。

7.2 執筆者について

記事の大半は署名の付された書き下ろしで、他雑誌からの引用記事はない。執筆者の素性は明らかではないが、日本庭園の記事を書いたR. A. Cramは明治期に来日し、国会議事堂を設計したことで知られる著名建築家であり、また、生け花の記事を書いている松本文恭はアメリカでE. S. Morseの助手を務めた人物である。また、他の

日本庭園に関する多くの記事も、内容から来日の経験者が記したものと推察される。

7.3 引用された記事について（他紙との関係）

他雑誌からの引用記事はないが、〈250〉の指図は「Couders's classic volume "The Flowers of Japan"」によるとある。この「Couders's」はJ. Conderと考えられる。なお、そのJ. Conderの著書が既に古典としてとらえられていたことは興味深く、わが国の文化を伝える出版物が普及していた様子が見えてくる。また、アメリカの日本庭園の紹介記事の中に日本の素性に詳しい松井文恭、E. S. Morseの引用が見られるがその出典は明らかではない。

7.4 各記事の紹介

収集した日本関連記事には日本の伝統建築やその専従者である大工などに関する記事はほとんど見られない。ただ、1908年の〈252〉では日本庭園を造るためS. FurukawaとA. Kimuraを雇い入れてたことが記されている。2人は「Japanese craftsmen」とあることから、造園家ではない。類似した職能ということで雇われたものと思われるが、当時のアメリカにおける職人の理解の仕方をうかがわせる事例と言える。次に、伝統的住宅の記事から伝統的住宅の認識の様子をみておきたい。1911年の〈259〉では日本住宅の特徴として、靴を脱いで室内に入る、室内は襖・障子で仕切られる、単純な線で構成されている、などが挙げられている。1919年の〈271〉はHG掲載用にA. D. Reedが考案した日本風のバンガローが紹介され、その特徴として柱が露出した構造（真壁構造）で、基礎は自然の玉石を露出させる、部屋同士の仕切にひとまとめにできる引き違いのパネルを用いること（図7-1、7-2、7-3）が記されている。これらから判断して、日本の伝統的住宅の特徴は理解されていたと考えられる。なお、当時の現



図7-3 日本風バンガローの間仕切ディテール
HG〈271〉1919年より



図7-1 日本風バンガローの外観
HG〈271〉1919年より

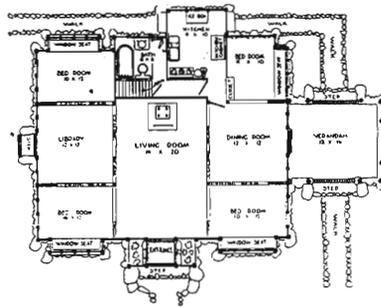


図7-2 日本風バンガローの平面
HG〈271〉1919年より

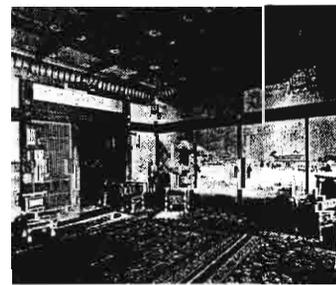


写真7-1 高峰譲吉邸のインテリア
HG〈270〉1919年より

代住宅について述べている記事としては1919年の〈270〉があり、大阪の日高伴設計の住友家を和洋の様式をうまく組み合わせた現代の日本住宅の典型として紹介している。また、ニューヨークの高峰謙吉郎（写真7-1）も、同類の住宅として紹介している。

8. 総合分析ならびに結論

8.1 1902~1910年における対象雑誌全体の動向

ここでは、対象5誌における件数の動向について相関的に比較するため、5誌が出揃う1902年から日本関連記事が減少した1910年までを対象として分析した。

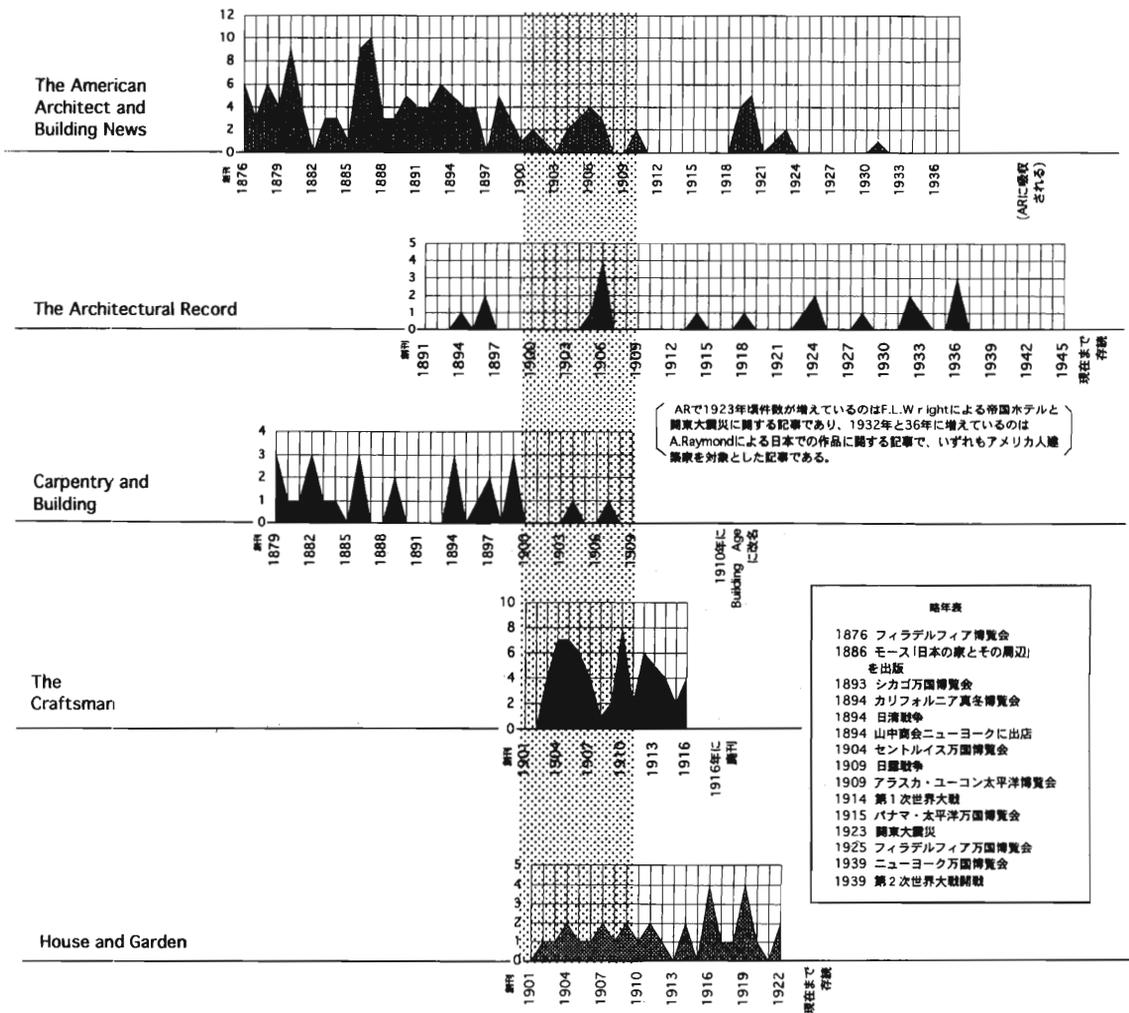
まず記事内容についてであるが、各雑誌の紹介において示したように、それらは購買層の潜在的な欲求がビビッドに反映された結果となっている。しかしながら、いずれの雑誌も19世紀まで残存したと認識された日本の伝統的精神性が、20世紀初頭の日本の軍国化、近代化のもとに変質してしまったという大きな物語の中にあることは納得されよう。鈴木博之の論考には、イギリスにおけるこれと同様の推移が1890年代以降に顕著になったことが指摘されている^(注8)。10年の後にアメリカにおいても、

同様の認識の変質が起こったのである。

さらにこの状況を、対象雑誌全体の動向を勘案しつつ検討すると、2つの特色が明らかになる。一つは、19世紀後半に創刊されたAABN、CBに共通するもので、それら2誌ともが20世紀初頭、1900年代初頭の日本の「近代化」に否定的に呼応したかのように、明らかに記事数が激減している点である。この特徴には、日本建築ならびにその専従者に対する初期的な学習（収奪）態度の継続（19世紀後半）と、日本側の近代的变化による学習（収奪）意欲の喪失（20世紀初頭）が反映されているとみてよいであろう。彼らは近代化の父親として、未開の子に野生の美を見出し、その子の成長とともに、敵対しうる隣人として日本を認識するに至ったわけである。このような認識の変遷はエキゾチズム一般のモデルにもよく合致しうる。しかしながら今回の調査で多く明らかになったことであるが、19世紀における2雑誌の記事には、それぞれに特色のある検討態度と予想以上に深い技術的知識の獲得があった。これについては大きく評価されるべきであろう。

もう一つは、20世紀初頭から創刊されたCR、HG2誌

表8-1 各雑誌の日本関連記事数の変遷



の、上記誌に比較した場合の継続的な日本記事の紹介態度である。この継続性には以前の2誌と異なった動機があったと考えるべきであろう。CRは、1900年代では質素な日本の住宅、生活自体の芸術性を賛美していたのに対し、それ以降はインテリアの問題としてそれらを扱うようになった。HGは、1900年代までは日本庭園の「深い精神」をテーマとした記事が多かったのに対し、それ以降は技術的側面を主たるテーマにしている。つまり2誌いずれもが、アーツ・アンド・クラフツ運動や近代的なバンガローの成立に関与していく中で、日本的要素を、より疎外的に自らの体系の一部として位置づけようような段階に至っていたことが推測されるのである。

以前の2誌に比べ2誌におけるアメリカにおける日本建築の影響についての記事(カテゴリーHに該当、表2-1参照のこと)が格段に増加していることは、これを反映している。つまりこの時期、アメリカにおいて「日本」は既に内向化していたのである。これらの内向化の過程をよく表しているのがARの記事動向である。1920年代以降は主にF. L. WrightやA. Raymond等によって咀嚼された「日本」を扱っているのである。

8.2 心柱をめぐる

各誌に共通する題材の取り扱い方の相違例を述べる。五重塔の心柱は、日本の伝統建築の潜在的な技術力の象徴として、その解釈をめぐる初期の関心と議論の中心の一つとなった。今回の対象雑誌5誌の中に4件(AABNに2件、CBとARに各1件)の関連記事があったので、その比較を行いつつ雑誌間の階層的差異について指摘したい。周知のように心柱をめぐる議論は、1882年から6年にかけてのイギリスの美学者ならびにデザイナーであったC. DressereとJ. Conderとの対立をもって代表される。端的にC. Dressereが日光の五重塔の心柱に振り子説を提示したのに対し、J. Conderはそれを部材の収縮による偶然的なものとしたのである^{注9)}。

両者の説に対して、1883年のCB〈164〉ではJ. Conder説を支持した。1886年のAABNでは、自由の女神を建設する際に起こった議論を取り上げた記事〈48〉に関連してJ. Conder説を支持している。1894年のARにおけるC.T. Matthewsによる記事〈136〉では、逆にC. Dressereを支持している。English Mechanics誌からの転載であった1899年のCB〈183〉では、五重塔を心柱への言及なく、全体的な振り子構造を持つものと解釈している。

これら雑誌、時代による見解の相違についてはさまざまな解釈が成り立ちうるが、特にいち早く反応したCBの立脚点に注意しておきたい。CBはアメリカの大工を購読層に持つ雑誌であり、19世紀を通じて特に日本の大工職人の作業に関する報告を主に行っていた。彼らにとって日本の大工職人の「優秀さ」は、当時のアメリカ内

の組合活動に関連した政治的背景の中で、脅威ともなっていたと推測される。ARやAABNにおける単なる称賛に終わらず、実地の観察による技術的報告が多いのもそのためであろう。この状況の中にあつて、彼らが機敏に技術的驚異を敷延するC. Dressere説よりも、J. Conder説を採ったのは必然的なことであつた。

繰り返しになるが、重要なのは、彼らの日本理解に対する「正確さ」ではなく、彼らの近代化にとっての〈鏡〉となりえた「日本建築」の意味なのである。従来からの定説でもあつたアメリカのモダニズムにおける日本建築の影響が、今後なお指摘されるとするならば、その主体は日本建築自体にあるのではなく、アメリカ側の主体的立場において成り立っていることなのである。

<注>

- 1) 日本建築がアメリカ建築に影響を与えたとする定説は流布しており、基本文献であるC. Lancaster "Japanese Influence in America". New York City: Walton H. Rawls, 1963. のほか、V. スカリー、長尾重武訳『アメリカ住宅論』鹿島出版会、1978年、William J. R. Curtis, "Modern Architecture since 1900" 等多くの美術、住宅関連文献に散見される。
- 2) 先駆的研究として鈴木博之による論考(参考文献参照)が挙げられる。その論点は日本建築ならびにその専従者についての考察を広く行うことが目的ではなかったが、本論を進めるにあたって前提となるものである。
- 3) 例えばAvery Indexにおける、建築家A. Raymondに関するものを除く伝統的ならびに日本近代建築の関連記事は75件であった。
- 4) 同住宅による別報告が、AABNによってなされている〈95〉。
- 5) Rustic Entrance and Gardener's Cottage at "Rocky Ledge" Newton, MASS
- 6) A Refreshment Building At Fish Creek, WIS
- 7) Competition in Modern Bungalows, April-June, 1909
- 8) & 9) 2) を参照のこと

<参考文献>

- ・注1) に同じ
- ・渡辺保忠：静岡におけるE. W. Clarkの住宅とその影響について、日本建築学会論文報告集、1960
- ・鈴木博之：ヴィクトリアン・ゴシック期の英国建築界と日本、Christopher Dressereと日本(含補遺)、ジョサイア・コンドルの建築観と日本、ジョサイア・コンドルと英国(いずれも『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊過程の研究』、中央公論美術出版、1996に所収)
- ・ケヴィン・ニュート：フランク・ロイド・ライトと日本文化、鹿島出版会、1997.9
- ・畑 智子：1876年フィラデルフィア万国博覧会の建築にみる「日本」、日本建築学会計画系論文集、No.503, p.195, 1998.1
- ・大島清次：ジャポニスム：印象派と浮世絵の周辺、講談社、1992.12

<研究協力者>

高田さとみ 西武建設(元文化女子大学 学生)